

平成 20 年 2 月 21 日
18:00~20:00
前原暫定集会施設 A 会議室

第 6 回（仮称）小金井市芸術文化振興計画策定委員会
【議事録】

次第

1. 計画の目的、方向等について
 昨年ヒアリング調査及びアンケート調査結果をもとに説明（事務局）
2. 中間報告会（公聴会）について
3. 今後の予定
4. その他

<資料>

1. 調査内容報告
2. アンケート単純集計結果
3. 策定委員個別ヒアリングまとめ
4. （仮称）小金井市芸術文化振興計画平成 20 年度予定
5. 第 4 回策定委員会議事録
6. （仮称）小金井市芸術文化振興計画策定委員会ニュースレターVol. 4
7. 「小金井市芸術文化振興条例」策定に関する報告書 ー本文追加ページー

[計画策定委員]

- ・大久保広晴委員 =出席
- ・大澤国栄委員 =出席
- ・久保みどり副委員長 =出席
- ・池口葉子委員 =出席
- ・田川尚子委員 =出席
- ・中野昌子委員 =出席
- ・増田章夫委員 =出席
- ・斎藤浩委員 =出席
- ・田中敬文委員長 =出席
- ・久保田美穂委員 =出席

[事務局]

- ・コミュニティ文化課文化推進係長
- ・東京大学大学院人文社会系研究科文化資源学研究専攻小林真理研究室

[傍聴者] 1 名

1. 計画の目的、方向について

昨年のヒアリング調査及びアンケート調査結果をもとに説明（事務局）

田中委員長

ただいまより、第6回(仮称)小金井市芸術文化振興計画策定委員会を始めます。今日は次第に従いまして、はじめに昨年度行ないましたヒアリング調査、それからアンケート調査について報告していただきます。

事務局（小林）

今日は調査の報告をさせていただき関係で、前振りでお話をさせていただきたいと思います。今回みなさんにヒアリングをさせていただいて、この委員会に対して疑問とかも随分あることが分かり、それにもお答えしておかないといけないなと思いました。私のほうから、なぜ東大がかかわっているのかとか、そういうこともお話をさせていただきたいと思います。

こういうような委員会って「市民参加でやります」という場合は多くの場合、行政にすでに思惑がある。やることが決まっていて、既定の路線があって、とりあえず市民参加の路線をとって、みなさんにとりあえず了承を得ましようというものが多い。先に言っておくと、ここでは何もありません。次に、東大に何か思惑があるかということ、それもあります。無いのですが、私自身には結構あります。私は芸術文化、文化政策を専門に研究していますから、各自治体で色んな文化政策をやってきて失敗した事例とか、そのほうが多いのですが、いっぱい知っています。税金を使って色んな文化活動をやっていくので、失敗することは敢えてやりたくないな、という気持ちは個人的にはあります。ただ、この委員会はみなさんの委員会なので、みなさんがそうであってもやりたいということであれば、私達は全然阻止するつもりもないし、失敗事例もあるのですが、みなさんなら出来るかもしれないということで、後押しはします。

行政のほうも思惑が無い。行政の思惑があってそれを手伝えと言われたら、私はやらなかったと思います。というのはそういう了承させられる委員会を散々やらされてきて、色んなところですごく嫌な目に遭いました。なぜ今回小金井市とやったかということ、色んなところで計画などが出来ているのだけれど、既定の路線があって了承するのではなく、一からつくろうということをやってみよう。それでやってみましようという形になったのです。そのことだけは私の言葉を信用してください。何も無いのです。本当のことを言って。

そうすると、何も無いものをどうしようという話なのです。私達はこの委員会2時間のためにかなり時間をかけて用意をしているのです。授業1コマで、委員会は4週に一回あるのですが、その前の3週分と、その前にも集まって学生たちにはその準備をするということがありますから、すごく時間をかけています。本当はそのプロセスをみなさんも共有されるとすごくいいのですが、時間が無いのでエッセンスだけ抽出してみなさんにお届けすると、すごく分かりにくかったりすることもあると、反省したりしているのですが、なんとかこの委員会で一緒にいいかたちでつくっていきたいという気持ちがあるのです。とはいっても、何をどういう風にやっていけばいいのか、正直言って手がかりが無い。それで調査をしなければならなくなったということです。

今日はこれから学生たちが用意したものを説明してくれませんが、それを聞いてまた色々考えていただければと思っています。

もうちょっと説明をさせてもらいたいのですが、条例が出来たことは何を意味するかと言うと、抽象的な話で分かりにくいというご意見もありましたが、これまではみなさんが文化や芸術が大事なのに、いくら行政に言っても何もなかった。やるかやらないかもわからない状態でした。条例ができたということは議会で議決されたということですから、これから「やらなきゃいけない」ということになった。今までとは全然違うのです。ただ今度はそのときに、今まではやりたい人達が言ってきて、それがいいからやりましょう、というかたちになったかもしれない。今度は簡単にそういう風にはいかないかもしれません。今度は市としてやるというかたちになったとしたら、その中でも「どれをやりましょうか」という話になってくる。なぜかという税金を使うからです。みなさんが勝手に自分たちの活動をやっていくには誰も邪魔しません。いくら小金井市がこれから芸術文化をやるぞと言ったって、莫大なお金をかけるなんてありません。やるっていつてもちょっとの予算しか出ないのです、悲しいことに。それをどういう風に配分すればいいのかとか、どういう風に使えばいいのかとか、何が市民のためにいいのかという優先順位とか、基準を考えねばいけないということになるのです。それをこの委員会でやらなければいけない。

みなさんに個別ヒアリングをさせていただくと、本当にすばらしいご意見をお持ちです。学生が聞いてきたのを見させていただいて、なんでこれを委員会のこの席で言うてくださらないのだろうと。この問題が出たらもっと色んな話を深めていける、計画作りに役立つのと思う話が沢山あるのですよ。今日はまとめさせていただいてみなさんにお渡ししているのですが、出来れば自信を持ってご発言いただきたいのです。それをきっかけにもう少し話を深めていきたい。まとめる作業は私達がします。分類もしますし、皆さんのお手伝いは私達がする。それが義務だと思っていますので、全面的にサポートします。ですから無理やり自分たちでまとめるというよりは、色んな意見が出てきて話を深めるということをして欲しいのです。なんとなくそういうことができなかつたから個別のヒアリングしてみようと思っただけのが今回の取り組みなのです。

そういう形でヒアリングさせていただきましたから、今持っているしゃる意見を本当に言うてください。

今まで時間もなかつたし、こういう委員会って議事録取っているとみんな「言葉に残るので、発言しにくいな」というのがありますよね。後で消せばいいのです。言っていないことを議事録に書き加えることは出来ませんよ。だけど残して欲しくないこと、例えば個人名が入っていたりとか、「これオフレコだよ」という話もありますよね。私は他の委員会では消します。だから、「ここはオフレコだから記録しないでください」と言っただけいいわけです。それから議事録修正のときに、残して欲しくないところは消していただいいていいと思う。だからもう少し意見を出して欲しいなと心からお願いします。話に收拾が無くなっても構いません。次の委員会までには、こういう話だったということが分かるようにしますので是非色んな議論を。

意見が出たときに、それはどういう意味とか、分からないなとか、ちょっと待ってよ、もう少し聞かせてくれる、というのがそれぞれにあってもいいと思うのです。それが無いと議論が深まりませんから是非、そういうことをお願いしたいと思います。

これから今まで調査してきたことをお話します。先ほど申し上げましたが、私達も分からない中で、まず意見を聞こうと色んな調査をやってきました。たぶん、このような形で色んな意見を聞きながらつくっていきましょうということは、どこもやっていないと思います。まとめるのは大

変だなと思わないでください。まとめるのはこちらで案をつくりながら、みなさんとやっていきますので心配しないでください。思っ感じたこととか、こちらで分析をしています「そうではないんじゃないの」とか「ここではこうだけど、こういうのはどうなの」とか、どんどん言ってください。それをまず心からお願いして、調査のほうに入ります。今日は次から次に順番に出てきますが、去年の条例を作る前に調査をしていますから、その話からはじめます。

事務局（中村）

アンケートの報告の前に、昨年度の調査の話からはじめさせていただきたいと思います。昨年度の調査については私中村の方から報告させていただきます。説明の際にお手元にご用意いただきたいのは、資料①と昨年度の報告書です。それとは別に事前にお送りしたレジュメもご参照ください。

なぜ昨年度の調査の話からはいるかというと、この計画は昨年つくった条例を受けて、条例の内容を実現させていくためにつくるものです。小金井で芸術文化を振興していくという一連の流れは昨年度からあったということについて触れたいということです。

市民の意見を聞く試みは昨年度でも行なわれ、様々な意見を頂いています。そのかなりの部分が今年度の議論とも重なっています。また、今年度でまだ議論できていない部分に関しても多くの指摘を頂いています。そうした流れの上に、みなさんが議論している委員会があり、アンケート調査もあるということをご確認いただきたいと思います。

昨年度の調査は3つです。詳しい内容は、みなさんにお配りした報告書の129-201頁をご覧ください。それから、こちらの手元には完全版のデータがあったのですが、今回作業して、委員の皆様にお配りしたこの黄緑色の報告書では、一部落丁が出てしまったことがわかりました。その部分につきましては、今回お詫びと共に挟み込み追加ページを作成したので、そちらをご覧ください。

3つの調査の内容は、まず街頭式ヒアリング調査。何箇所かで東大の学生を使って耳で聞く調査を行い、小金井のみなさんから2日間で71件のご回答を頂きました。街頭でこれだけつかまるのがまずすごいです。訪問式ヒアリング調査は市内の芸術文化に関わるグループ、団体を訪問して行ないました。フリーワークショップというのはこの後話なのですが、2回に分けて行なったもので、ワークショップの形で意見を聴取するもので、合計35名の市民の方から意見を伺いました。

昨年度の調査は、街頭式ヒアリングや市民ワークショップでは、まさに直接「市民の声を聞く」ことを意識してやりました。

また訪問式ヒアリング調査では、これまで行政とおつきあいがなかった団体や、学校教育ではなく芸術文化という視点でお話を聞く機会のなかった小中学校の音楽の先生や美術の先生など、これまであまり意見を聞く機会がなかった16団体のお話を伺えるよう工夫しました。学校の先生も教育委員会ではなく、芸術文化でお話を聞かせていただいたことは無かったので。それぞれの団体でお聞かせいただいた意見は、報告書や事前にお配りした資料にまとめたとおりです。

数としては決して多くはありませんが、直接お会いしてお話しつつ意見を聞いていったプロセスを通して、小金井の市民がどのような意見を持っているのか、そのおおよその方向性を探ることはできたと思います。今年度行なったアンケートのように大量ではありませんが、個別に

丁寧に意見を伺い、量ではなく質的な特徴を探るものでした。質的な部分では意味のあるものだったと思います。

昨年度の3つの調査では、ご協力いただいた市民の方から、このようなご意見をいただきました。個々の意見は、お手元の報告書をご参照いただきたいと思いますのですが、大きくまとめると、このような観点についてご意見をいただきました。小金井市内の芸術文化活動についてだとか、はげの森とか、市民交流センターとか。担当者の方はこういった芸術文化活動に取り組んでいるか。それを踏まえた上でどういった問題意識を感じているか。やっぱり情報が無いとか、活動場所が不自由だったりとか、アクセスの話。そうした中で行政の役割や市民の役割や小金井市の目指す姿についても伺いました。

訪問式ヒアリングでは個別の団体を訪問させていただいたので、自らの活動、学校だったら学校の活動と美術の関係というところでお話を伺いました。そこでは情報に加えて資金とか人材とかにも困っていて、活動を継続的に出来る仕組みが大事だということを意見として伺いました。そういった中で行政の役割や市民の役割、そこへ団体としてどうやって関わっていくかについてもご意見を伺いました。

フリーワークショップではある程度まとまってきた部分もあったのですが、やっぱり行政の役割や市民がどうかかわるかについてご意見があったほか、こどもとか高齢者、障害者など気をつけていないと芸術文化に触れる機会を奪ってしまう可能性があります。そこでも人材とかネットワークとか場所が必要で、場所と言ってもハコとしての施設ではなくて、ソフトの面でも、すでにあるものを活用するとか、空き場所をうまく使うとか、そういう視点もありました。

そのようにして得られたご意見は、条例を作成する際にも参考にしました。理念・小金井らしさ・小金井市の目指す姿については、前文や基本理念に、特に若者・子ども・高齢者・障害者への配慮は3条の「条項」や7条の基本施策に反映されました。また、現状の問題点として指摘された資金・場所・情報・人材等の論点は、環境整備として基本施策として、3条のほか、4条や7条でも意識されました。行政の役割、市民の役割、団体の関わりについても条項に反映しました。継続性を担保できる仕組みは、市の役割の他、8条の計画の策定や、9条の推進機関の設置へとつながりました。

そもそも、条例が出来るということ自体が、今後小金井市が芸術文化振興を継続して行なっていくことを保障する、公的な約束とっていいと思います。

そして、芸術文化振興条例の8条に定められた基本計画を策定するに当たり、広く市民の意見を聞いて反映させるために、今回改めてアンケート調査を行ないました。その結果についてはこれから説明しますが、アンケートの構成も、これまでの流れの上にあるものです。

アンケートは大きく4つの部分で構成されていますが、まず、「①芸術文化への関心」は、街頭式ヒアリングの内容を改めて確認したくて設けた質問ですし、「②小金井の将来像」についても昨年度の調査や条例を受けてより具体的な姿を探るために行ないました。「③将来像の実現方法」についても昨年度の調査や条例で指摘された環境整備の具体的な内容や、行政の役割、市民の関わりのある方を聴いています。なお、「④ライフスタイル」については、政策を効果的に実施するのに必要な情報を集めるための設問です。回答者の性別・年齢・職業・居住年数・居住地域のほか、よく買い物に行く場所や普段目にするメディア、自由時間や自由時間を過ごす地域についても聞いています。

ここまで確認してきたように、昨年度の議論からの流れの上に、今年の議論も行なわれていま

す。実際に、これまでの委員会でみなさんが議論してきた内容と、これまでの議論で、重なる部分もたくさんあります。今年の委員会のこれまでの議論は、これまでの議事録をみると、大きく4つの柱ですすめられてきたと思います。事前にお配りした資料は、この柱に沿って、昨年度の調査の内容を抜粋して、まとめたものです。環境整備として、資金とか場所、情報、交流といった切り口でまとめました。基本原則・目指すイメージも、昨年度の調査で出されていた理念と重なる部分があります。政策で何をやるかについて、前回の議論で情報の重要性や学校との連携といった話が出ましたが、そういった指摘について、去年どういった意見が出たかもまとめました。また、行政と市民がどのように係わり合い政策を進めていくか、協働のあり方についても、さまざまな意見が出されていました。こうした昨年度の調査の内容についても、今年度の調査とあわせて、委員会での議論の参考にしていただきたいと思います。

ここまで確認してきたように、皆さんが今議論をしているのは、決して唐突に始まった議論ではないのです。昨年度調査を通して市民の意見を取り入れて作った小金井市芸術文化振興条例の内容を実践していくための基本計画を考える、それが今ここで行なわれている議論に至る流れで、少しずつですが、着実に積み重なってきた蓄積があります。

どうしたらいい計画ができるか、前例も乏しくて難しい問題ですが、これから報告するアンケート結果や昨年度の調査などにも目を配りつつ、みなさんと一緒に考えていきたいと事務局一同は思っています。新しい計画を作るのは、なかなか難しい仕事ではありますが、これまでの積み重ねの上で、この委員会での議論があることをご理解いただいた上で一市民として、どうか自信を持って積極的にご発言いただければと思います。昨年調査については以上です。

田中委員長

委員の方たちの中で去年の調査に当たった方はいらっしゃいますか。

事務局（小林）

増田さんはワークショップに出てくださいましたね。

事務局（佐藤）

佐藤です、よろしくお願いします。アンケートの話に入ります。その前に、みなさんこれが気になりませんでしたか？計画の文字が違うのは、ロゴをつくってまして。

事務局（中村）

たとえば、はげの森美術館のロゴの「森」の字と同じように、同じものを使い続けることでアピールすることも大切なのではと思って、多摩美術大学の学生さんにご協力いただいてデザインしていただきました。

事務局（佐藤）

今年やった市民アンケートの報告をさせていただきます。使う資料ですが、アンケート単純集計という資料と事前に関心にお送りしたアンケートの実物です。これをやってこの結果が出たと。

田中委員長

ご回答なされたのですか？

斎藤委員

見た覚えがあります。

事務局(佐藤)

市民アンケートの報告ということでやるのですが、ただこのタイトルではつまらないなということで、「見えないものを見るために」というちょっとあやしい副題がついています。なぜこのタイトルをつけたかと言いますと、単純集計では棒グラフで多い少ないを示していますが、この議論で重要になってくるのは少ないけれど重要な議論かもしれないという点。みんながやりたいからお願いしますという声を聞くだけではなく、むしろ小さいけれどすごくこれが必要なんだと言っている人がいるかもしれない。その人の声を聞くことでアンケートが生きてくるかもしれない。見えないものを見えるようにするための方法はないかということ、切り口などを含めて説明させていただきます。

もくじですが、まずアンケートをやった概要。つぎにアンケートをどう見ればいいのか。三つ目、アンケートはどういう意味があったのか。ここまでが全体の話で担当が替わりまして後二つ、年代別分析と満足度別分析をしますので、これでもっと詳しく見ていきます。

前置きが長くなりましたが、アンケート実施概要にはいります。みなさんにお配りしたアンケートが、どういう風に行なわれたかを見ていこうと思います。アンケートの対象は18歳以上の小金井市民2800人を無作為抽出で選びました。どうやって選んだのかと言うと、住民基本台帳から2800人選んだので外国人は入っていません。期間は11月7日から11月25日締め切りでやりました。11月7日は発送した日なので1日か2日で市民の方の手に届いたということです。25日が締め切りと書きましたが一週間後にも届いた回答があり、それが結構な数あったので、それを含めて合計で975通。35%の回収率。これ非常に高い数値だと思います。

参考までに、「市長への手紙」というのが小金井であったのですが、ご存知の方もいらっしゃるでしょうか。これは市政一般へのアンケートで、2000人に送ったのですが385件で19%の回収率だったということを見ますと、市のこと何でもいいから教えてくれと言ったのに対し、芸術文化について教えてくれと少し特化して聞いたはずなのに35%の回収率は大きな数値であることがわかんと思います。

ではアンケートをどういう風につくったのかを見ていこうと思います。先ほど中村さんの説明にあったように、昨年度からの調査の流れでできてきました。具体的に言うと、芸術文化のどの分野に興味がありますかということであったり、それは小金井市で満足してますか、であったり、満足していないなら何に困っているかを聞きました。芸術文化で小金井を良くしようと言ったときにどういった小金井市がいいのか、何を大切にするのかを「将来像」として聞きました。そして将来像を実現するためにどういった方法があるのかをかなり具体的に聞きました。最後にアンケートに答えたのはどういう人だったかを見るために、年齢や性別をききました。このアンケートの構成の中では、3. 将来像の実現方法が重要になってくるのではないかと思います。というのは、将来像やある程度抽象的なことはこれまである程度議論されてきて、条例ができてきた。では条例に書かれたことを実現するためにはどうすればいいかと考えたとき

に、アンケートの構成の中で3番の答えが重要になってくるのではないかと。そこで、次に実現方法を尋ねたときにどういった答えが出てきたかを具体的に見ていきます。最後に聞いたライフスタイルというところでは、アンケートにどういう人が答えたかを見ることで、アンケートの結果がどういう人の意見かも見えてくるので、これもお話ししようと思います。

3番の「将来像の実現方法」を見ていくのですが、その際に見えないものを見るために、どんな切り口でアンケートを見たのかを説明しながら結果を見ていきたいと思っています。まず将来像を実現すると言ったときに誰がやるかという問題が出てきますが、そのときに私達は、3種類の行動をする人が居るのではないかと考えました。見せる、教える人、アウトプットと書いてあるのですが、自分でやった活動を人に伝えたり、表現しようとする人が居るのではないかと。それを見る人が居るし、習う人が居るということで二つ目のインプットという人を想定しました。もう一つ、忘れがちなのですが重要なことで、支える人というのを設定しました。表現をしやすいように支える人だったり、何かを習う際にそれを手助けする人だったり、その間をつなぐ人が居ると思います。

こういう考え方で作ったのがアンケートの間6です。「あなたは今後芸術文化活動にどのように関わっていきたいですか」と一つの問いで聞きました。3つの人の分類を考えていたのですが、一つの問いで聞いたのには理由がありまして、つくる人、見る人と言っても一人の人が両方やる場合もあると思うのです。あるときは鑑賞する人だが、あるときは他の人がやるのを支える人だったり。そういう人が見えてこないかなと思い、間6では敢えてごちゃ混ぜに質問してみました。他の間をみるときでもこの3つの関わり方があるという視点で見ると、アンケートも違って見えるのではないかと。

二つ目の視点。将来像の実現方法は問7～問10で聞いています。ここでは4つの分類をしてみました。昨年度の調査で出てきたことを分類してみたのですが、まず機会や制度がある。施設や場所ということで、どういう場所が必要か、どういう運営の仕方がいいかを問8でできました。三つ目はみなさんの議論の中で何度も出ていた情報という問題があると思います。どんな情報がほしいか、どのように情報を得ているかを聞きました。最後に、計画は行政が関わるので、どういった役割ができるかを問10で聞きました。この4つの切り口を設定してアンケート質問をつくりました。

では結果がどうなったかを見ていこうとおもいます。まず単純集計の間7の部分を見ていきます。何が分かるかと言うと、明らかに「優待制度」が一番多い。二番目に出てくるのは「街角や公園などでの催し物をしてほしい」。この二つが突出して意見として出ています。街角や公園などの催し物と関連しまして、三つ目の丸として「空きスペースの利用」も多く出ています。公園や街角で催し物をするということと、空きスペースはすごく関連していて、一つの施設だけでなく様々な場所でやりたいという意見であるととれます。もう一つ「交通手段がほしい」という意見も見逃せないと思います。以上が問7で出てきたもの。

次に問8。どんな施設や場所が望ましいですかと聞いたときに、はっきり見えてきたのは「一流アーティストの公演をしてほしい」というのが一番多く出ています。似たような形で数字が出ているのが「市民向けの入門講座や教室がほしい」という意見。三つ目は「近隣地域との施設利用の連携をしてほしい」という意見。先ほどの三つの分類を思い出してこれを見比べると、上二つはインプット。鑑賞する人がすごく多いことがわかるが、発表する人がどういう意見を言っているかを見ると、選択肢3「若い芸術家の制作や発表の場」が結構な数がでてきている。

それと 180 の数が出ている「練習スペース、スタジオやアトリエも必要なのではないか」という意見も見ておいていいのではないかと思います。

では次に情報の話。望ましい情報ということで、どういう情報がほしいかをききました。一番目に「市内の展覧会や公演の情報がほしい」という意見と「市外の展覧会や公演の情報がほしい」。これは市内外共通して、公演、展示の情報がほしいという意見が最初に上がってきました。三つ目に多いのが「専門家お勧めの情報がほしい」。こうして数を見ていくと、やはり鑑賞する人なのですが、選択肢 7 の「活動拠点と出来る場所の情報」があります。8 は「活動を発表できる場所の情報」というのがある。発表できる場所の情報よりも、稽古場やアトリエであったり、活動できる拠点となる場所の情報がほしいという意見が多いのは、練習場所の問題があるということに関わってくるのではないかと思います。

問 15 でも情報のことを聞きました。小金井の情報をどういうものから得ていますかと聞きました。これははっきり出たのですが「市報」が一番多くなっています。委員会の中の議論でもあったのですが、情報は何が必要かというところ、インターネットなど他のメディアがでて、市報はあまり見ていないという意見があったのですが、圧倒的に市報を読んでいる人が多かったということはかなり大きな発見ではないかと思います。情報の話は以上です。

最後に行政の役割をどう期待しているのか。これは多くの選択肢が選ばれ、そんなに数の差はないのですが、一番多いものとして「先進的な自治体の政策の調査研究が必要ではないか」という意見。二番目に多いのは「専門スタッフを配置する必要があるのではないか」という意見が挙がって来ました。それと選択肢 7 「財政的基盤の確保」がトップスリーです。「市民団体や NPO、大学との連携が必要ではないか」という意見、「窓口を設置してほしい」という意見もある。以上、アンケートをどう見るのかという切り口の部分を説明してきました。

今まで結果を見てきたのですが、アンケートはどのような人が答えていたのかという確認しておく必要があると思います。アンケートの最後で性別をきいたのですが、女性が 60%、男性が 38% で女性が多数。女性対男性が 1.6 : 1 です。アンケート結果を見るときはなんとなく女性の意見が多いということは頭に入れておいてもいいのかなと思います。小金井市の人口比を見ていくと、小金井市の人口は 11 万人で女性と男性の比が 1 : 1 なので、このアンケートは女性が多数ということが分かります。

次にどのくらいの年齢の人が答えているかを見ました。棒グラフの左側はアンケートを答えた人のパーセンテージになります。右側は小金井市全体の人口比です。ぱっと見てわかるのは、アンケートに答えた人は小金井市の人口比に比べて 50 代以降の人が多くということです。注意すべきは 10 代で、アンケートに答えた 1% というのは 18, 19 歳の人しか入っていないことを表しています。

大久保委員

人口のほうは 10 代全部入っているのですか？

事務局(佐藤)

10 代全部入っています。

では小金井市内のどこに住んでいる人が答えたのかというのを見たら、すごいことにほとんど誤差はでませんでした。違いは 1% 以内に収まったということは、あらゆるところからデータが

取れたと言える。

いままで話したことをまとめると、アンケート全体として人口比と比べると 50 代以降に偏りがあるのですが、地域差の誤差の小ささをみると、だいたい市内まんべんなく意見がとれたのではないかということで、平均的な意見としてみても構わないだろうということが分かります。一方で見るときにただ見るだけではなく、いくつか切り口を出しましたが、情報とか場所とかの切り口で見ていくことが非常に大事ではないかと思います。

もっと深く見るために、というところで担当を変わろうと思います。

事務局（豊田）

豊田です。まず訂正があります。単純集計の表紙の説明ですが、「棒グラフは単一回答、円グラフは複数回答」というのは誤りで、「棒グラフは複数回答、円グラフは単一回答」の設問を現しています。

私の発表で使うのは資料①です。もっと詳しく見るということで、年代別に分析したもの、満足度別に分析したものについてお話します。まず年代別から見えています。真ん中のグラフはアンケートに答えた人を色別に示したものです。一番左が 10 代で、10 代は少ないので面積が狭い。私達は年代別で見るときに 50 歳で区切りました。この区切り方にはご意見あるかと思いますが、50 歳で切ると色々傾向が分かれたのです。

まずは 40 代以下の傾向を見ていきます。左のグラフは単純集計を年齢別に切ったもの。ここで長い棒は沢山の人が答えたということです。右のグラフは、選択肢 1 を選んだ中で何十代の人が多いかという割合を示したものです。右上の全体と書いたグラフは、アンケート全体の年齢の割合を示したものです。「40 代以下の人々の問 4「小金井の大切にしたいところ」の答え。全体としては選択肢 1「自然環境」や 2「水環境」が多く緑豊かな小金井市のイメージを共有されていることがわかるのですが、40 代以下の傾向として言えるものは、選択肢 5「お祭」と 6「阿波踊りやカーニバル」。これを右のグラフでみると、薄い水色までの左の部分がほかの選択肢よりも多くなっている。40 代以下の人が多く答えた選択肢としてお祭やカーニバルなどにぎやかなイメージのものが多くことが分かった。問 6 では芸術文化にどう関わっていくのかを聞きました。選択肢 5「催しを企画する」を選んだ人の中で 40 代以下が他よりも多い。問 7 のどういう機会や制度がほしいかについては 6「空きスペースを使えるようにしてほしい」とか 7「機材のレンタルがあるといい」という回答の中に、40 代以下の割合が多いようです。問 8「どんな場所がほしいか」では、選択肢 8「練習スタジオがほしい」と答えた人の中で 40 代以下が多かったのです。今まで出た、企画をしたい、空きスペースの利用や機材レンタルがあるといい、練習スタジオがほしい、小金井といえばお祭やカーニバルのイメージがあるという 40 代以下を、乱暴にまとめてみると、活動的な傾向のある世代と言えるかもしれないと思いました。

次に 50 代以上の傾向を見ていきます。問 1 で「興味がある芸術文化の分野」を聞いたとき、全体では選択肢 1「美術」、2「音楽」、7「映画」に関心があるようですが、3「文学」に関心があると答えた人の中で 50 代以上の割合が多かった。問 2 で芸術文化への関心は満たされているかどうかを問うたところ、全体では選択肢 3「都内を含めば満たされる」が圧倒的に多いのですが、1「小金井市内で満足」を選んだ人の中で 50 代以上の割合が高い。問 14 でどこから情報を得ているかを聞くと、全体ではテレビ、新聞、インターネットなどが多いが、回答者の中で 50 代以上の割合が高いのは選択肢 2「ラジオ」だった。これをまた乱暴にまとめて、文学に

関心があり、芸術文化への関心は小金井市内で満たされ、ラジオが情報源である 50 代以上を考えると、もしかすると行動範囲が意外と狭く、個人で楽しんでいる方が多いのではないかなと考えて見ました。

50 代以上の傾向はもう少しあります。サポートしたい 50 代以上。これはどういうことかというところ問 6 で芸術文化への関わり方を聞いたところ 7 「寄付や寄贈をしたい」と答えた人の中で 50 代以上が多かった。もうひとつ、運営したい 50 代以上。問 8 で望ましい場所や施設を聞いたときに 11 「市民による施設運営」を選んだ人の中で 50 代以上の割合が高かった。最後に、問 17 で移動手段を聞いたのですが、全体としては 2 「自転車」が多かったのに対し、50 代以上の回答者が多かったものは 4 「バス」。移動手段でバスを選んだ人のほとんどが 50 代以上でした。以上が年代別の分析です。

次に満足度別で分析をしてみたいと思います。なぜ満足度別でみるかということ、不満な人は小金井市に課題を見出している人なので、彼らの意見は重要だと思ったから。それから無関心な人の意見を取り上げたわけは、普段は意見を聞くことが難しい人々なので取り上げてみました。不満な人は、問 2 芸術文化に対する満足度で 4 「満たされていない」を選んだ人。全体の 16% で 157 名です。問 3 で不満な人は何に困っているかを見ていきます。左のグラフは全体の単純集計で、右は不満な人の単純集計です。グラフの山の形の違いを見てください。不満な人の中では選択肢 6 「活動場所が無い」を選んだ人が多かった。これはホールのことを言っているのかもしれないし、何かほかの困難があるのかもしれない。また、不満な人は選択肢 10 「面白い催しが無い」も多く選びました。内容が不満なのか、それとも見たいような催しがそもそも無いのか、どちらなのでしょう。問 9 では不満な人がどういう情報を求めているかを見ました。不満な人のグラフでは選択肢 4 の「チケットの入手方法」というところが、全体の山よりも高くなっています。チケットの買い方を知らないのか、ほしいチケットが無いのか、どちらでしょう。

増田委員

市内でチケットが要る催しはほとんどありませんからね。それは東京都全体を含めての話で、小金井でチケットが手に入ったらいいなという話。

田中委員長

小金井でチケット買うところはないのですか。

増田委員

ありますよ。長崎屋のチケットぴあです。

中野委員

今なくなりましたよね。

久保田委員

コンビニで買えますね。

事務局(豊田)

そういうことだったんですね。不満な人というのは、先ほどのコンビニの情報などが分かるようもう工夫すれば、満足度が上がるのではないかと思います。

次に無関心な人の意見。これは問2で「芸術文化への満足度」を聞いたときに5「関心が無い、わからない」を選んだ人です。全体の5%でわずか48名なのですが、誰もが芸術文化に関心があるわけではないということを考えると、彼らの意見は少ないながらも聞いておく必要があると思ってとりあげました。問3で無関心な人が困っていることは何かをみていきます。無関心な人は選択肢3「お金がかかる」を多く選んでいますが、この人はお金をかけずに楽しめる方法を知らないのかもしれない。8「情報が無く、どうしていいかわからない」も選ばれています。芸術文化に関わりたいが、どうしていいかわからないという気持ちの表れかと思います。無関心な人はどういう情報がほしいかという、4チケットの情報がほしい。無関心だといっているが、チケットの入手方法がわかれば見に行く気はあるのではないかということが分かります。最後に、問10で行政に何を求めるかを聞いたところ6「窓口の設置」を選んだ。これは、無関心だが芸術文化にふれるきっかけを求めていることの現われかも知れません。こうして見ると、無関心な人は心のバリアフリーを必要としている人なのではないかと思いました。芸術は敷居が高いといいますが、心理的な敷居が低くなれば、彼らも関心を持ったりするのではないかと思います。以上でアンケートの話は終わりです。

事務局(鈴木)

質問なのですが、年代別の分析で40代で切って分析をしています。私は50代で年寄組に入れられたから不満なのではないですが、50代までは現役で働いている人が多いのかなと思うのです。60代ではリタイアした人が多く行動パターンがそれによって全然違ってくる考えると、これだと50代と40代とでは行動パターンが違うのかなと思ったり。内容によっては生活に余裕が出てくる。生活のゆとりとか経済的なゆとりとか考えると50代以降で考えていいかなと思うけれど、行動パターンで考えると80代の人と同じグループだというのはどうかなと。どうして40代で線をひかれたのか理由を教えてください。

事務局(遠藤)

今回年齢別でざっと切ってみたときにまず、グラフの左右のずれを一番見やすかったのは40代50代のはざまだった。右上の全体の小さいグラフを見ていただきたい。40代50代の切れ目は大体50%のところにあって比べやすいというのがありました。それで比べるといくつか傾向が出てくるので、今回40代、50代で切りました。われわれの中でもその区切り方には問題があるのではないかと意見がありましたが、とりあえず今回はそういう形でご報告させていただきました。

大久保委員

不満な人157人の年代別データありますか。

事務局(豊田)

画面のこの2つが満足度について年代別に切ったものなのですが、それなりにどの年代にも不

満な人はいるようです。

齋藤委員

単純集計の中で問 11 と問 16 が抜けているのですが、これは？

事務局（中村）

今回は全体の傾向を報告することを優先したので、自由記述の部分は抜かせていただきました。11 や最後の自由記述で、小金井にこういった活動があるよというような、様々なご意見を頂きましたので、これから整理していきたいと思います。

齋藤委員

年代別の分析を比べられているのですが、「若い人は活動したい」というまとめ方をされているのですが、その前の表を見ると絶対数で見るとほぼ同じような答えだと思うのです。ただ年齢を見たときに、こういうのを求めている人はこの年代が多いということなんだろうと思うのです。逆にこれにくくってしまうと違う結論に行きそうに思います。40 代以下はこういうのをやりたいというのを見ても、絶対数で言うと全然違うところに答えがあるわけで。今後何かを立てていくときに企画が必要だったり、何かやるときには 40 代以下の人を選んだほうがいいたろうという結論の出し方ならいいと思うのですが、40 代以下の方はこういう企画をしたかったり、こうだよ、というまとめかたにしてしまうと、絶対数から見ると変な答えになっちゃう。そのへんのまとめ方は気をつけられたほうがいいのではないかと。

事務局（小林）

私達が今回思ったのは、絶対数が多いことをやればいいというだけではないということ。お客さんがいっぱい集まればいいようなことをわざわざ税金をかけてやればいいのかということじゃないのではないかと。たとえば活動したい人たちをサポートしようということを計画の中心に置くことになったときには、若い人たちを、とういうことが視野に入ってくるということをお願いしたい。確かに実数としては大きくない。しかし絶対数に引っ張られない考え方をしないと少数者の意見が反映できないということがあります。

齋藤委員

そこが前振りにからんでいたのですね。

田中委員長

もしそうならば、40 代 50 代で分けたように、次に世代ごと 30 代、20 代はどうかとまとめる必要がある。回答者の人口構成をみると 70 代 80 代あわせると大体各年代比率が同じになる。すると年代ごとの特徴がもう少しリアルに出るのではないかと。そうすると年代に対してどういうアプローチができるかという話ができるようになる。

これから小金井市芸術文化振興計画をみなさんで考えていく時に、不満な人、無関心な人というのがありましたね。不満な人は 16%、無関心な人は 5%。無関心な人の関心を引き上げるのはなかなか難しいとすると、とりあえず 5%の無関心の方はわきに置いておいていいのですか。

それよりも不満な人の満足度を高めるほうがいいのですか。それとも全体的に、不満な人も満足度を高めるために考えなければ駄目だし、無関心な人もなんとか関心を引き上げるようにしなければいけないのか。このアンケート調査の結果は難しいなと私自身は思いました。

大久保委員

私としてはアンケートに答えなかった 1800 人の人もとても重要だと思います。その辺の人を関心を持たせるのは難しいんじゃないですかね。劇場に足を運んだり、自分で活動するということは、余暇を過ごすことの中のパーセンテージを見るととても少ないと思うので、アンケートを返さなかった人もそういうところに入ってくるのではないかと。マーケットは大きいと考えた方がいいんじゃないでしょうか。

田中委員長

40 代になれば自分で活動をやりたいという人も居るし、どちらかという鑑賞者でいたいという人も居るわけで、政策としては両方の人を対象にしなければいけませんね。いろんなこともできそうだけど、その分いろんなことをやらなければいけないんじゃないか。そういった大変さみたいなものを感じた次第です。どこかに焦点を当ててやることはなかなか難しそう。でも今日のお話にあったように時間と資源、お金に限りがあるとすると一度に短い期間で全部の人が満足できるように、すべての人が関心持つように、活動やってる人、鑑賞している人の目的をそれぞれ達成するようにするのは難しいなと。

増田委員

芸術文化の場合はそういう傾向が強いですよ。他にも趣味や楽しみ方はある訳ですから。その中で 35%が選択するのはすごい数だと関心はしていますが、5%しか無関心がないというのも驚きだ。回答した人の 8 割の人は関心を持っているわけだから。これはすごい数字だと驚いています。あと市報はよく見られている、これはびっくり。市内の情報は市報しかないというのが現状なのかもしれません。ですから市内でやっていることに関心のあるひとは市報を見る。年代別の 50 歳以上が半数以上、主婦層も多い。比較的市報を見る層の方たち、たぶん 60 代以降の方は市報は見ているんですね。それにしても非常に関心が高い。

事務局（小林）

関心のない人はやはり重要だと思うのです。5%しか出ていないが、返さなかった人ももしかしたら関心の無い人とか、忙しい方もいらっしゃると思いますが。なぜ私が関心が無い人が大事かと言うと、たとえばこれから交流センターができるというような話の中で、実はああいうホールって全国に 2000 件くらいある。みんながやりたいからどんどんつくろうというかたちで作ってきたが、使われてないケースがほとんどなのです。つくって自分たちで自由に使えるかと思ったら、使うためにはお金必要だし維持費も管理費もかかって、使われなくなる。何年か経つと、特に今みたいに財政状況が悪くなってくると、あんなものなんで作ったんだという話になってきたのです。私は小金井の一番重要な課題はごみ施設の問題だと個人的に思うのです。自然環境が重要だというのなら、なぜごみ焼却施設をちゃんとつくらないのですかと。それなのに芸術文化の交流センターとは何ぞやという話になる。それは私はすごくいやなのです。芸

術文化交流センターをつくって、活動の拠点ができる。だけど今まで無関心な人に、自分が行く行かないは別として、「こういうのがあってよかったね」という活動って大事。しかしそれが一番難しいのです。だけどたぶんやりたい人は、出来たらどんどん自分たちでやると思うのです。やっとうこういう施設ができた、稽古場もあるようになったということで。もしかしたら交流施設の規模だと足りなくなっちゃうかもしれないですね。これだけ色んな活動やりたい人がいるので。そうしたらいろんな空きスペースも探してあげる。小金井の場合は具体的な活動がすでにあるから行なっていく。そういう人達のための情報だという話になるのですが、実は関心の無い人にどれだけ「芸術文化ってなんかいいよね、楽しいよね」と感じてもらうか。子どもたちがこんなに生き生きする、おじいちゃんおばあちゃんが引きこもりがちだったけれど、もし文学好きな人がたくさんいるなら読書会やって出てくるようになったら元気になったとか。そんなことで少しでも認められてくと輪が広がってくると思うのです。

増田委員

そうですね、市民交流センターも単なる文化施設じゃないことが特徴だと思うのです。コミュニケーションできる場を1階部分にとっています。心配しているのは、特に駅前で色んなところに影響力がある場所にできているのでとりわけ1階部分が使われてないと駅前が暗くなる。ですから、あそこはお年よりも含めたコミュニケーションの場としてやっていかないといけない。コミュニケーション+ホールみたいなかたちでもともと計画していますので。それから周りが非常にスペース多く空いているのでそこをどうやって活用するかとか、工夫はある。ただ具体的に何をやるかということになると、そこまで煮つめてないなというのもあるのですが。あちこちにある単なる大きなホールとは違うのですね。ホール自体も570席程度ですから、有名な人を呼んでやるという風にもいかないホールで、そうすると市民たちで、ホールが必要な人をいれる。それから駅前だと非常にアクセスがいいと思います。アクセスのよさと規模に合ったものをやっていけば、変わっていくと思っています。それから練習場がない。あそこの地下一階は練習室が4つあるのですが全部防音室。小金井は音楽の練習ができないのです。なかなかそういう施設がないから、うっかりやると近隣から苦情が出る。地下一階が防音になっているので練習場所としてかなり使われるのではないかと。われわれ活動して一番大変なのは場所取りなのです。場所取るのに抽選出るだけでも大変な思いをしています。絶対数としてはあれが出来ても足りないと思います。

この前原なくなる、萌え木ホールも使わなくなるという前提が入っていますから。さほど今の状態より改善されないのでは。暫定はあれができるまでしか使わない。萌え木は借りてるわけだから。予断ですが駅前のホールに名前つける話がありまして、駅前を萌え木ホールにしようという話もありますから。定着したのなら駅前にまた「萌え木」をつかってもいいかなと。

中野委員

無関心の話が出ましたけれど、市の方で文化鑑賞会を何回かやりましたよね。そういうのに出てこない友達を引っ張って行ったんです。やっぱり見ればとても関心持つのですよね。「これからもこういうの誘って」と言うので、やっぱり人から人への声かけが無関心な人でも引っ張っていけばどうにか参加できるということができないのではないかと思うのですけど。大きなことをやろうというのではなくても、10年計画ではなく、もっと市民レベルに下げて、市民が

中心になって参加できるものをどんどん活動して行って、それを反省にもってきて、また大きく広げていくというかたちで。最初は小さくてもいいからやってみたらいかがかないという感じがするんですけど。

いろいろなイメージだとか、やりたいものが結局はもう決まっていますよね。表にしてくださっているので。その中からイメージとやりたいことと一緒にして、一つの小さいことからみんなやってみて盛り上げて、それから反省しながらやってみたらいいんじゃないか。何しろやってみなきゃ分からないんじゃないかという感じがするんですけど。難しいことばかり意見言い合っても前へ進んでいけないのがすごく残念なのです。

田中委員長

まあ、今はアンケート調査のことについて、それを踏まえて話をしているので。他にまだ調査について何かご意見ありますか。

田川委員

私がちょっと疑問に思うのは、今このアンケートの男性対女性がちょっと違いますよね、割合が。私自身が公民館事業に携わっていて、どんな一流の先生を呼んできて参加する方は大体女性なんです。だから40代なんかとても来ないし、50代も60代も来ない。

田中委員長

60代も来ないですか？

田川委員

60代も男性は来ない。何人かしか来ないですね。だから実際40代以下はこのアンケート自身、女性が答えているんじゃないかなということが。

事務局（小林）

ただこの間の久保田さんがやってくくださった市民講座の時は非常に男性が多かった。

田川委員

あのね、時間帯なんですよ。うちも座禅とかやったときに時間帯を18時からにしたんですね。そうしたら男性が来るんですよ。でも若い方と言っても50代くらい。会社終わってくる。それは絶対事実で、どんな市報に出して載せても都内から講師を呼んでもだめなんです。大体女性が来るんです。

事務局（小林）

だから今日の話ではなかったんですけどね、男性か女性は別なのですけど。50代とか60代以降ですね、引きこもりがちにちょっとなっちゃっているものもある。だから関心はあるのだけれど出ていくきっかけとか。来たいなと思っていたりしてもアプローチの仕方が分からない。心のバリアフリーみたいなものも言っていましたけれど、そういうのも結構あると思うのです。実は前にこんな話があったのですがイギリス美術館でね、高齢者の人たちは来にくいから、と

にかく施設をバリアフリーにしようということで建設のバリアフリーをしたんですね。ところが来てもらえない。どうしたら来てもらえるんだろうかということで、NPO を作ってきたいといったらすぐに迎えに行き連れに行くと。そこまでしたら来たい人はいっぱいいるのです。ですからさっき交通手段の話もあったんですが、どこまでこれをやるかというのはちょっとわからないのですが、本当は来たい人とかやりたい人がいるんだけど、実は技術的な問題がほかにもあるかもしれないけれど、それをつなぐ、サポートするところがないんじゃないかということも言えると思うんですね。それをちょっと整備するだけでもしかなしたら、座禅もそうですがトライする人が増えてくるかもしれない。そういうことをするとやれることが増えてくるかなと思います。

久保田委員

いろんな層が必要ですよ。交通をカバーしてあげるレイヤーがあって、いろんな情報を与えてあげるレイヤーがあって、場合によっては迎えに行く手続きがあってというのをやっぱり、重層的に考えていかないとなかなか一般的な話というか、この年齢層だからといういい方だと難しくなると思うんですね。きめ細かくいろんなレイヤーが必要ということになると今度はじゃあそれを誰が担うのということになると、役所だけではだめだったり、もっといろんな手が必要だったり。可能性も逆に出てくるような気がしますけれどね。私なんか掲示板が好きでよく見えていますけれどね。

久保委員

もっと身近に感じてもらえるように。誰に対しても。アンケート出さなかった方とかも自分が芸術よりスポーツの方がうんと好きという方はもう見る前にシャットアウトだったと思うんですけど、そういう方も駅前にホールができてああここでこんなものやっているというように市全体がなってくれば、お年寄りとかもやっぱり日本人って迷惑かけちゃいけないとかそういう思いつてすごくあると思うので、そういう中で隣のおばあちゃんも行ったんだとか、気軽に行けるんだわって身近に感じられることができるようになると、すごく参加する方はいいんじゃないかなと思います。

事務局（小林）

本当にそうですね。そこでいつもですね、身近ですよといくら書いてもだめなんです。やはり敷居って高いんですね。だから最初の一步をどういう風にしていくかというときに何か手助けのNPO とかが出てくる。ちょっとそこで手助けの時には市が最初は助成しましょうというようなやり方もあると思うんですよ。せっかくホールもできるし、本当はそういうところ以外にもいろんなところが活動場所であって情報やなんかも共有できて、その情報も質を高めていく必要があると思うんですよ。

増田委員

更新していかないとだめなんです。おんなじだと見なくなっちゃう。

事務局（小林）

この間の話にもありましたけれど、団体なんかの名簿はどこにでもあるんですよ。だけど、今そういうのってあんまり外に出せないですよ。だけどそういうのを市民で集めたりして、たとえば講座の時に尺八の先生がいらっしやいましたけど、あの先生、たとえばとても教えるのが上手なんですとかなんか素晴らしくいい音色の尺八ですとかね、なんかそういう情報って行政はつけられないんですよ。公平じゃなければいけないから。だけど市民で取材して、だけどその取材にもお金がかかるからそういうところを出しましょうとか、そうすると蓄積されていきますよね。そういうやり方もあると思います。

増田委員

ボランティアというかね、文化ボランティアみたいな。それは交流センターの計画の段階でも入っていましたね。運営の中にも入っていましたし。客の案内とか切符切る役とか。あとは展覧会何かやっているとはやりポスターと市報と、インターネットは知りませんが一番効果があるのは葉書ですね。作品を出した人に少なくとも最低 30 枚は持たせるわけです。そして必ず出してもらう。そうすると葉書もらうと直接そこから開けてくる。知り合いから攻めていく。その人がまた誰かを連れてくる。一回やると次の回また行こうかと、こういう風になる。それはやっぱり回を重ねていかないと、1 回 2 回ではなりませんよ。やはり定着するのは 5 年 10 年のスパンで見ないと。

田中委員長

アンケート結果についてまだご意見ご感想言われてない方いますか。大澤さんどうでしたか。

大澤委員

先程関心がないということですが、今のやはり皆さんのお話を聞きながら、まあ前からちょっと思っていたんですが、やはり見てない人、わかっていない人も多いと思う。私がアンケートとった場合もやはりわからないとか興味を持ってないものはアンケート書けない。勝手なことも書けないし廃棄処分してしまいますよ。だけど今増田さんが言ったように、1 度 2 度とかじゃなくて何回か回を重ねていくごとに興味を持っていく。まあアンケートちゃんと書いている人もそれがわかって書いているか分からないし。私も増田さんのところに叔父がいるんですけど、叔父が来るたびにいろいろ私が説明されるんですよ。正直あんまり仏像に興味なかったんですけどまあすごいんですねーなんて調子こいて言ってたんですけど、毎回毎回見せられているうちにだんだんこう吸い込まれていく。興味を持つようになって今何体かいただいている。そうしないと、こうやって参加させてもらっている私でさえ、やっぱりアンケートいきなり来られてもすぐに書けない。あとだから、市民の方でいきなりこれを出されても、これはすごい思ったより数が帰ってきたと言われていても、申し訳ないのですが、見たものじゃなくて聞いてこれがあるから伝統的な美術かなという風にした人も圧倒的に多いと思いますので、まずは一度見せたり、聞かせたり、そうしてからまた取り直すとまた違って本当のアンケートになると思います。

久保田委員

そういう意味ではご優待みたいなものって有効なのかもしれませんね。

大澤委員

そういうのもありましたよ。計画の中に。会員制でやるという。優待制度。どこでもやっていますよ。そういうのは。

田中委員長

池口さんいかがですか。

池口委員

基本的には皆さん今までお話ししてくださったこと、そうだなと思います。私はやはりここに出せない声をいかに出すかということが永遠の課題だと思いますけれど、やはりとにかく見せていくということが大事。今を見せていってまた次を作るという。先程中野さんがおっしゃった視点とは違うレベルで話しているのかもしれないけれど、とにかく今あるものをどう見せていくか、どういう風に作っていくかということと、あとはやはり情報。さっきから言っていましたけれどやっぱり情報なんだろうなということで、市民を使う情報というのをどう作っていくのかというのを考えていきたいなと思います。

大久保委員

情報のことなんですけど、先ほど小林先生からも行政の情報を勝手に収集できないとありますが、はたしてそれが本当なのかどうかと僕は疑問に思っていて、市民にとって有益な情報であるならば行政は積極的にその情報を集めて発信することが必要なもので、文化芸術についても市民がみんなで作るというのは必要なんですけど、行政側が最初からそれを私たちはできませんという風に言えるのだろうか。むしろ全部の団体の情報を全て把握したり、その中で市民が窓口をした時にその中で有益な情報を提供する等の役割をやった方がいいかと思うのですが、皆さん、いかがでしょうか。

増田委員

「出してもいい」と許可さえもらえればどんどんやった方がいい。出たくないという人もいるかもしれないので。まあ普通は今そこで承諾取らないので名簿作るときに大変ですよ。了承するのが大変。時間かかっちゃって大変。町会の名簿今ほとんどないですよ。どこでも作らなくなりましたから。

事務局(鈴木)

小金井市では個人情報保護条例がありますので、それに抵触しない範囲であれば情報を持つことはできます。その中にご本人の承諾を得るものという項目がありますので。それを取らない限りは個人情報を持ってはいけないことになっております。ただ個人情報保護の観点がちょっと行きすぎという論もありますよね。学校でも子どもたちの親の連絡先を教えられないとか。昔だったら緊急連絡網なんていうのもありましたけれど、それも作れないというようなことがあって、見直したらどうかという考え方もありますが、今のところ条例に沿った形でしか情報を持ってない。それがどの範囲かっていうのはまた。たとえば名前とか住所電話番号も全て個人

情報になりますよね。やはり出来る範囲としては、こちらでこういう趣旨の名簿がありますので登録してくださいとお願いをして、一定の人にですね。そこに参加して下さった場合は登録する。だけど公開する時にはやはり公開の原則がありますので、今生涯学習課で市民講師登録者名簿は出していますけれども、あそこにはお名前も性別も年齢も出せないんですね。非常に抽象的な表現しかできない。ただこういうことができる人がいますという。あとは何かあったら生涯学習課に来て名簿を見てください。それもご本人がいいという範囲のことしか公開できない。じゃあどうしたらいいのかというのはこれからの問題になるわけですが、やはりなんでもかんでもこちらで個人情報を集めて知らせるということとはできないという現状です。

田中委員長

大久保さんが心配したというのは、こういう利益団体がいます、たとえばこういう活動をやっています。代表者はこういう人ですという、その連絡先はこうですというものもだめですか。

事務局(鈴木)

団体は了解を得れば大丈夫です。

増田委員

団体はだいたい大丈夫。

斎藤委員

市報に載せているところは大丈夫ですよ。募集は。

事務局(鈴木)

募集は市報のそこに投稿して下さる方というのは限界があって、たぶん皆様方がほしいという情報はなかなかないかなと思います。

増田委員

一方的に団体の方の事情で集めているからね。

久保田委員

もうちょっとベースになるスタティックな情報と、評価がいっぱい書いてあってプラスの評価が多いものとかを買っちゃう傾向があったり、口コミの書き込みありますよね、それはやはりかなりものを決める評価の材料になっていますよね。そういう風に考えると結構情報って生きていて、まあダイヤルQ2みたいになってはいけないけれど、今回のアメリカ大統領選挙ではないけれど、いろんな人がアクセスすることで情報の質が上がって行くということはあると思うんで。一方的に外に出すというだけのものじゃなくて、そういう評価をする視点を持っている方がいい。そういう方がアクティブな情報のあり方でいいかなと思う。

事務局(鈴木)

行政が評価するのは難しい。

久保田委員

行政は評価しなくていいですよ。

事務局（鈴木）

たとえば小金井に引っ越してきた方がお医者さんにかかりたい、どこのお医者さんが評判がいいですかねと聞かれてね、個人的には評判とかは聞いているけれど、そういうことは一切お答えできない。それと同じでこういうことを習いたいけれどどの教室に行ったらいいでしょうかねと聞かれても、この種類はこういう教室がありますよということはできますけれど、じゃあどこがいいかと聞かれた時に行政としてはここがいいということは言えないですね。

増田委員

そこから先はアクセスは。

事務局（鈴木）

こことここはやっていますから行ってみたらどうですかというくらいしか言えないですね。

久保田委員

全部が全部行政がやらなくてもいいんじゃないかなと思いますけれど。

大久保委員

行政じゃなくてもいいんですけど、やはり前回から話があったたとえば人がコンピューターに入れるものよりも、人間の頭の方が回路が早い。話を相談されて何がいいかと答えられる人がいいと思うのですね。文化担当のコンシェルジュみたいな人が本当は行政にもいて、あらゆる講座を見てきていてどんなものなのか、どういう結果になるかをちゃんと見ていて、まあ行政が難しいならそれが財団になってもNPOになってもいいんですけど、そういう人が、こういう小さい市ですので一人いれば全然違うと思うんですね。みんなその人に聞きに行く、その人が全部振り分けてやるというようなホールだったり地域であれば、すごくうまくいくと思いますね。それがなかなか行政という形ではそういうことはできませんけれど。たとえば財団ができてホール担当も2、3年で変わってしまうとそういうことはできないので。そういうのを何かできるように。私はでも窓口に来たら、何がやりたいこんなコンサートに行きたいと聞かれたら、別に私の仕事とは関係なくお勧めのものは勧めますし、電話かけてきてピアノの練習したいんだけどどこが空いていると聞かれたら、うちは空いていないんだけど民間はこことここがあるよというのは、私は普通にやっていて、そういうのは普通に役立つと思うので、そういう人が小金井市にもいればいいと思うのですが。

事務局（鈴木）

財団だとそういう規制っていうのはないのですか。

増田委員

あります。

大久保委員

わからないです、たぶん市民サービスとして窓口で答えられるものは、たとえば目の前で怪我されたら「この怪我だったらどこに連れて行け」という風に言うと思うんで、あまり規制は強くないとは思いますが。

2. 中間報告会（公聴会）について

田中委員長

今、情報収集それから提供、世代別に見る、無関心な人は実は鍵を握っているとありました。これを本当は踏まえないのですけどね、実はもう一つ大きな課題が今日はあります。来月中間報告会を予定していますね。3月13日、木曜日に予定しています。今年度のいわゆる成果を市民の皆さんに報告して議論し合う。ご意見をいただく。討論しあう場が3月13日です。具体的にどういうことをやるかについては1枚紙がありますね。

今まで出られた方はイメージがつかめるとは思います、今度は今まではお客さんとして出てきたのが、自分たちが今度は行ってみればリードを取ってやっていかなければいけないこともあります。場合によっては皆さんグループに入っていていただいて話をまとめるとか、あるいは私が今こうやっているように黙っているところを引き出すというようなところを皆さんがやらなくてはいけないので、じゃあ今までどういうことをやったかというイメージをつかんでいただきたいと思います。ではお願いします。

事務局（柴田）

それでは次回の中間報告会に向けて、皆様にワークショップのイメージを持っていただくために、昨年度の条例策定委員会の中で行われた市民ワークショップについてご紹介したいと思います。

昨年度は、夏と秋に2度のワークショップを開催しました。会場はこちらの前原施設で、「みんなでつくろう！文化・芸術のまち小金井」というテーマで、広く市民の方々に参加を呼びかけました。参加人数は夏が27名、秋が8名でちょっと少ないのではと思われるかもしれませんが、これに委員の皆様方や市職員の皆さん、そして東大の学生たちも加わりますので、会場はかなりにぎやかな雰囲気でした。

それでは、実際どういう内容のワークショップを行ったかについて、お手元の資料イラストと、当日の写真をお見せしながらご説明いたします。「ワークショップ」というのは、もともと「作業場」とか「共同作業」といった意味の言葉で、自分の手や頭や口を動かして、みんなで作業したり話し合ってみよう、というやり方です。前回の久保田委員の市民講座でのワークショップをイメージしていただければ、十分お分かりいただけるかと思います。

まずイラスト1のように、参加者には話し合いのしやすい少人数のグループに分かれていただきます。【写真1】夏のワークショップではこのように7・8名のグループに分かれて、小金井の文化について話し合っていました。【写真2～4】

その際イラスト2のように、机の上に大きな模造紙を広げて、自分の発言を付箋にメモして

いくのがポイントです。こうすることで、話し合いの中身がはっきり見えるようになり、後から議論の内容を整理しやすくなります。【写真5】当日は小学生の男の子も参加してくれて、このように一生懸命意見を言ったりメモを取ったりしてくれました。

次に、イラスト3のように、ひと通り討論を終えたら今度はそれを整理してみます。模造紙の上にメモを書いた付箋をたくさん貼っているので、自由に並べ替えができるわけです。関連のありそうな内容をひとまとめにしたり、流れを整理しているうちに、だんだん結論が見えてきます。

【写真6】なおワークショップ当日は、委員長の田中先生がこのように各グループの様子を見て回って下さいました【写真7】。【写真8】また小林先生や、【写真9】文化課の方も一緒にグループの中へ入って下さっています。

【写真10】そして最後には、イラスト4のように、再び参加者全員が集まります。そこで、例の模造紙と付箋を使って、各グループごとの発表を行います。【写真11~19】

このように昨年度は、文化芸術に関心の高い市民の皆さんにお集まりいただき、大変充実したワークショップを行うことができました。来月の公聴会も、このような形式で市民の方々と共に語り合うことができればと思います。その際に、どのようなことを話し合うのか、市民に向かって何を問いかけるのかについて、これから皆様でご協議いただきたいところです。簡単ではありますが、以上でワークショップのご説明とさせていただきます。

事務局（鈴木）

今柴田さんの方からお話いただきましたけれども、次回このワークショップの時にどんなことをテーマにしてほしいか、聞いてもらいたいんですね。参加者は今のところご希望はないのですが、来年度4月以降ここで皆様に討議していただくのに、どんなことを参加者に聞いていただきたいかということをお出しいただければ、それに沿った形で進めていきたいと思えます。アンケートの結果は出ています。それから去年のヒアリングの結果も見させていただきました。それ以外にどんなことを聞いてみたいと思われませんか。アンケートの結果で皆さま方は大体傾向がお分かりになった。だけれどもそれプラスどんなことをお聞きになりたいことを今日お出しいただければ。今すぐで無理でしたら今月中くらいに私の方にご連絡いただくということでよろしいでしょうか。

事務局（小林）

皆さんもしお時間があればご参加いただいて一緒に話して確認したいことっていうのもあると思うんですね。それで先程委員長さんがおっしゃいましたけれども、これだけの要望がある中でやらなければいけない。ということは反対に、やはりそうは言っても優先順位はつけなければいけないということです。無尽蔵にお金があるというわけではない。少なくともどういう風に優先順位をつけていけばいいか聞きたいとかですね、できれば皆さんにご参加いただいて自分たちがこれからそれを決定していくための何か後ろ盾になるようなことを聞いていけばいいと思うんですね。

事務局（鈴木）

お時間が過ぎていきますので今月中に何かありましたら、どんなことを聞いてほしいか私の方に

お寄せいただけますでしょうか。

大久保委員

既にどんなことを話すかテーマは決まっているのですか。

事務局（鈴木）

決まっていない。

大久保委員

一個も決まっていない？

事務局（鈴木）

はい。

田中委員長

基本的にはこういう条例がありますと。今こういう仕事を1年間頑張ってやりましたと、ここまで議論が出てこういうことをやりましたとお話することは、まずは出発点としていいと思うのですね。おそらくその場に来た人がみんな我々の活動を熟知しているとはとても思えないので、どんなことをやったかその我々の活動成果の報告の場でもあると思うんです。それからさらに参加者からもご意見をいただく。それを来年度、今年度は今日で最後ですから、今度の4月からの議論に活用したいとそういう希望があります。委員長としてはですね、皆さんお忙しいと思いますが、この日は一参加者、あるいは意見引き出し役みたいな形でぜひ参加していただければと思います。これは委員会ではないのではっきり言ってみなさんにご期待するという形です。

事務局（小林）

ヒアリングさせていただいた時に、時間が短いとかですね、もっとざっくばらんに話したらどうかというご意見をいただいたんです。それでたとえばなんですけど、ワークショップの後にちょっと皆さんから実費はお取りするんですけど、ちょっとアルコール入れてね、エンドレスじゃないけどやってみてもいいんじゃないかと思っているんです。まあアルコール入ると少し気が楽になりますしね。

増田委員

経験上、それはすごく有効だと思います。

事務局（小林）

みんなでどこかお店に行けるといいんですけどそれもちょっと無理なので、ここでやる場合、それはいいと鈴木さんからいいと言ってくさっているの、そういうのもありかなと思っているんです。

増田委員

すると結構いろんな意見出ますよ。

事務局（小林）

ワークショップはちゃんとやっていただき、報告して意見は出していただいてそのまま反省会みたいな流れでここでやってもいいかと。

増田委員

毎回やってもいいんじゃないですか。

事務局（鈴木）

市報ではご案内しているんです。市報に掲載したんですけれども今のところどなたも来ないとなっていて。当日直接来られることを期待しているんですけれども、是非お声掛けをしていただきたいと思うんです。といってもですね、まだチラシも何もなくて、実は前回の会議の時に大久保さんが作ってくださったこのチラシを皆さんお持ちだと思っておりますけれども、こういうのすごくいいよね、ということで、気になるところもちょっとあってですね、一般的な行政からのお知らせ、いつどこで何をというのではちょっとないんですけれども、策定委員会としてこういうような内容のものを表面刷りにしてチラシを作りたいと思っています。ちょっとこれは前回お聞きして今回お配りできればよかったんですが、これはこのままでいいのか。ここは気になるというようなところがあればご指摘いただいて、皆さんにお配りしますのでそれをご活用いただいて、お声掛けに使っていただければと思います。あとは回覧板が3月1日号で出ることになっていて、それでお知らせする形になっています。

事務局（小林）

じゃあもし、懇親会もやろうということであれば20時から懇親会は参加費たとえば500円で開催しますというのもあった方がいいですね。

増田委員

それはそうです。そういうのはあった方がいい。

事務局（鈴木）

20時から交流会ということでみなさまご出席ということでいいでしょうか。

田中委員長

ご予定があれば個別におっしゃったらいい。これは委員会じゃないので。

事務局（小林）

いくらだったらいいですか。用意する都合上の問題なんです。

事務局（鈴木）

その時だけじゃなくて毎回やったらどうですかというご意見もありますね。毎回終わったらテープを切って、その後というのも少しずつやってみたいと思います。とりあえず交流会をワークショップの後にやるということで。参加費 1000 円で。

大久保委員

中間報告会はとても重要な私たちの今までの議論とこれからの参考になるので、やっぱりもう少しここでもうちょっと時間をいただいて、何をテーマにするかだけでも決めてしまいませんか。あとからメールで送って何を取られるかというのもとても不安なので。5分10分でもいいので。委員長お願いします。

田中委員長

今日は一応 21 時までという風にご連絡していますので、お時間ない方はここで言うだけでいいと思います。ご苦労様でした。

事務局(鈴木)

では田中委員長よろしいでしょうか。

田中委員長

ご自由にどうぞ。

池口委員

今までの成果をお話しするとさっき言っていたのですが、はたしてこの議論の成果は一体なんぞやってちょっと思ったのですけれども。その辺をお聞きしたいなと思いました。

田中委員長

今日は東大の人が作っていただいた議事録、いつも作っていただいている文章の議事録がありますがその前に A4 の 1 枚のホワイトボード記載内容というのがあるでしょう。そういうところで、たとえば今日話題になっていた、特に前回情報の話は非常に話題になっていましたけれども、情報の集約化で言うと個人情報を扱うのは難しいとかね。決まったことというよりはこういう話が行われました、やろうとしてもやはりこういう問題がありましたと、そういうのをやっぱり知っていただくというのはありますね。これは 3 月 13 日にお越しになった方もやはりそういう話をする方はいると思うんですよ。情報がないという。そういう我々はいわゆる話題提供的な役目ですね。前は具体的な条例を制定するという話があったのでやりやすい面でもあったんですよ。どんな項目を入れるとかね。ところが今回の場合は芸術文化振興基本計画をつくるということなので、具体的にその計画もいつなかにやるかという計画を立てるのではないんですよ。まだそこまではいっていないんです、残念ながら。どういう風な方向で議論をしようかと話しているところなので、むしろ色々意見をいただきたいというところなので。それだけに皆さま方のご参加が非常に私は鍵になってくると思っています。私自身はやはり何回もワークショップはやっていますけれども、初めておやりになる方がほとんどだという風に仮定すれば、条例はこういうのを作りました、内容はこういうものです、というお話はもちろん委

員の方をお願いするようなことではないとは思いますが、やっぱり必要かと思います。それでその後、実は委員会でもこういった問題点がありますというのでいくつか、3 つくらい出してそれについて皆さんどうですかという風にご意見をいただく。フリートーキングをやれば、必ず出る項目は経験上わかっています。ホールがほしいとか、金を出せとかそういうのがいっぱい出てくると思うんですけど、しかしそれだと最初に戻っちゃうので、逆に我々の方からこれについてはどうでしょう、こういう問題点がありますというように話を出していけばもう一歩先の議論ができるんじゃないかなと思っています。これはあくまで私の意見ですが。

大久保委員

じゃあたとえば予算ゼロで何ができるかということを皆で話し合うとか。

久保田委員

100 万しかないけれどあなただったら何をやりますかとかいう聞き方をすると。予算ゼロだと、むしろ金なくてもできるアイデアはいっぱい出るかもしれない。

大久保委員

そうですね。予算ゼロで事業も各自治体色々やっていますから、予算がなくてもその人が動けば何かできるということはあると思うので、芸術文化においても、もちろんそれが最高の形ではないですけども、できることはいっぱいある。たとえば小出郷なんかは多分相当予算は少なくなくて、いわゆる市民講座の講師も募集する。それをちゃんとお金をとってきてちゃんとやっている。まあ予算ゼロでも、小金井市も講座もできる。

増田委員

市民大学もゼロですね。参加費 100 円。それは資料代。講師は終わってからいっぱいやるだけ。その時の会費が無料になる。

池口委員

ただ何をテーマにするか。

増田委員

幅広いからね。

田中委員長

何か大きなテーマを決めますか。

久保田委員

何を引き出したいかということですね。優先順位の考え方の論拠は聞いておいてもいいかなと思います。それをどうやって引き出すか考えたときに、予算ゼロだと限りがあるけれど、どうやってやるか考えたときに優先順位の考え方はとれるかな。この段階で何を聞きたいかということですよ。

事務局（小林）

確かにゼロだとね。たとえば 100 万円だと。100 万円をどうやって配布しようかと考えるときに、昔よくやっていたのは公平に 100 団体いるんだったら 1 万円ずつ渡すというやり方だった。だけど実際 1 万円だと何にもできないですね。それだと政策効果が上がらないというのはわかっている。じゃあどういう配分の仕方をしてみましょうかと考えてみるとかですね。どういう事業をしてみましょうかとか。そこに具体的にその人たちが何を優先的に考えているかは出ますよね。

田中委員長

何か具体的に行事を設定しますか。100 万あったら何しますかというのはちょっと漠然とするな。

大久保委員

行事というとイベントっぽいくくりになってしまうので、別にそうじゃなくてたとえば教育に 1 年間使ってもいいので。そういうくくり、行事というのにしなくてもいいと思いますね。

事務局（小林）

100 万くらい出せるんですかねとか聞かれちゃったらどうしよう。

増田委員

あとは補助金引っ張ってくるとかいろいろある。小金井はね、期待してもだめだけどね。知恵と汗をかかないと。

大久保委員

一般の方が話すときにそのくらいは具体的じゃないと話が進まないんじゃないかな。

事務局（小林）

ここにいらっしゃる皆さんが 100 万だったら何をされるのかということをもしろお聞きしたいなと本当に思う。だからワークショップに誰も来なくても、むしろここであらためてその問題を話してもいいかもしれないですね。無理矢理呼ばなくてもいいかもしれない。

斎藤委員

何に使うかという時の目標っていうのかな。芸術文化振興計画のやっている会の答えを出したいんですね。それに参考になる。文化振興計画を最終的にどういう形になるか。そういうものを出していくための案出しをしたいわけですね。何を言いたいかわからなくなっちゃったんだけど、たとえば 100 万を何に使うかという問いかけでそれが出るのかなという。100 万なんてやり方次第でポンとなくなっちゃうから。

増田委員

そうだね。

久保田委員

100万は妥当かどうかはわかりませんが、たとえば市の予算がどうなのかとかいっちゃってそれをどうやるとか。

増田委員

いや、予算はこれから変わっていかねければできませんよ。当然。駅前ができてきたりするわけだから。それで条例もできて、計画ができれば今までの予算でできるはずがないので、少なくとも数倍の予算じゃないと。

斎藤委員

情報がほしいという話があって、その情報をまとめていくというのがまずは優先順位でやるべきだろうということに答えがなくてもいいと思う。それとあとはたとえば優待券がほしいとか100万円当たった人にあげちゃおうとかいうのもね。

田川委員

私だったら参加するためのものと支援することで、支援だったら懸賞金の一部にするとか、あと育てるという意味で助成するとかに配分します。

事務局（小林）

どういう風に支援する人を決めますか。

田川委員

たとえば年代別に参加型だったら、たとえば高齢者を参加させるという意味でなんかにお金を使うとかね。あと、子どもを育てるという意味で作文とか絵とかそれを幅広く市民全体にね、そういう年代別に使いたい。意外に秋とかよく小説とかの募集してやっているじゃないですか。たとえば小金井だったら小金井公園を題材にした小説とか。これはマネですけど。たとえば深大寺の恋物語とかを主婦がとったりとか。子どもを育てる意味で音楽でも絵画でも懸賞金とか。そして学びながら競争していく、まあ競争と言ったらおかしいけれどそういうのができるといいなと。

斎藤委員

賞金だとそれでおしまいじゃないですか。募集はしますけれど。これは仕入れの金額であって、売り上げはもっと大きくなければいけない。大きくなるように要は仕掛けを作るわけですよね。今あるのは商工会はビジネスプランを募集したりとか、夢プランを募集する。皆自分たちのやる中で100万でやりたいんだけど、20万補助するよと。すると100万の事業をやってくれるわけですよ。そのようにまあ懸賞を出すにしても、募集したら100万円あげるというのではなくて、みんながやってくれるうちの一部を挙げるよというような形でやれば、100万がもっと大きい事業にそれぞれ化けてくる。そういう仕掛けをこういうもので組んでいくと。入れていけるの

か。

事務局（小林）

入れましょうよ。私が言っちゃいけないのですが、補助金制度とか作りたいんですよ。いいタイプの、大きくなっていくような補助金の制度を作りたい。今たとえば小金井じゃなくて国分寺でやっている仕事があるのですが、それは出したお金で自分たちの活動がよりよくなっていて、ある意味で活動が自立していくのをサポートするような補助金制度を今作ってやりだしているんですね。そうするとみんなにばらまくんじゃなくてやりたい人がどんどんやっていけるようになるし、少なくとも公平性が確保されるし、評価もちゃんとされるシステムを今考えているんですね。だから何か大きく戻ってくるみたいな、確かにですね、出しちゃったら終わりじゃないというのもあるんです。でもそれでも何か見えないあれが絶対あるはずなのです。日に日に広がっていくという。だけどそういう考え方というのはあると思う。大きく戻っていく、大きく広がっていくという。

齋藤委員

プランを募集するという段階でいろんなプランが多分出てくると思うんですね。面白いのもあればつまんないものもあるし。それをみんなの中で優先順位をつけて、ここにはこうつけようとかね。自分たちやりたい人は別にお金つけなくてもやるからね。そういうのをどうやってやるようにするかね。

増田委員

大体補助金は今そういう傾向にありますよね。大体 100 万円の事業をやると多くて 20 万かせいぜい 30 万。それをもらうためには、事前の相談をして、ヒアリングをやって審査会に出ているわけですから、もらうまでの手続きって結構大変ですよ。今大体そういう風に厳しくなっている。小金井市ではそういう手の補助金は全くありませんけれど。

事務局（小林）

国分寺でやったのはそういうタイプにしたのです。でもそれが初めてだと言っていました。

増田委員

東京都だとか国のレベルではそれはありますよ。小金井とか市単位っていうのは非常に少ないと思う。そういう意味では面白いかもわからないですね。

事務局（小林）

ただ、もともと、行政がやるとうるさいんですね。これはやっちゃいけないあれはやれと。だけど国分寺でやっているのは、できるだけ応募した人をサポートするようにとだけは言っているんですよ。今までそういうのを出したことがない人には書き方も教えてあげる、プレゼンの仕方も教えてあげる。それでその代り公開をして、どういうところが補助金を取っていくのかも見てもらう。審査委員会っていうのがあって、私審査員でいやなんですけれど実は、それがすごく問われるんです。何をみているか問われる。それはすごくいいんですね。評価会もある

んです。

増田委員

新しい文化が育つという風になりますね。そういうのをきっかけになんかやってみようという気になりますよ。ゼロじゃなかなかね、できないんで。そういう補助があればやってみるかなという人はいっぱいいると思いますよ。そういう新しい文化を掘り起こすにはそういう制度があればね、いいなと思いますよ。

事務局（小林）

すいませんちょっとまた余計なことを。私が狙っているのは一つあって、なるべく多くの応募があるように窓口で対応してくれとすごく言ったんです。私の一つの目論見がその審査会に市長が来るんですよ。それで応募者が多いと。なかなかいいプレゼンだと。すると今まで100万だったけど来年はもっと増やさないといけませんねと言わせようと思ったら、言ってくれたんですよ、本当に。そうすると受け皿が。そうやって広げていくんです。成果が見えてくると市長もつけようということになるし。

斎藤委員

それを今度の公聴会でそういう投げかけをする。どう投げかけると一般ということで来られた方々がいろんなことを言ってもらえるのかな。

田中委員長

お金の話はやはり生々しいですよ。おいでになった方が多少の経験者でないと。聞くのが専門、参加するのが専門の方はちょっとなかなかとっかかりにくいところがありますね。たとえば今日の調査を聞いてですね、参加している人も不満な人がいる。どうやったら満足度を高められるか。その話の一つにお金もあるわけですね。そういう形だったらお金は使いやすい、話しやすいと思うんですね。あるいはちょっと私が一回出したのは無関心な人。さっき自分では歩いてこないけれど、車を迎えにやればやってくるという話がありました。そういう無関心な人をどうやったらひきつけるか、何か皆さんアイデアはありませんか。みたいな形の方が話しやすい。そこでまだ車が必要だから金が必要だという話になってくればそれはそれでいいんですが。なんかそういう具体的な話の方が私としてはやりやすい。

大澤委員

なにも見せないで興味持たせるということですか。

田中委員長

もちろんなんかあってもいいですよ。ただここはその無関心というのは広い意味で芸術文化に対するということでやっているの、音楽が嫌いとか絵が嫌いという話ではない。

久保田委員

無関心な人像というのをどう描くかですよ。

田中委員長

無関心というところがちょっと多少難しいので、その不満だと、その不満を少しでも満足を得させるにはどうしたらいいのかという方がやりやすい。

大澤委員

何も見ていないのに…。

田中委員長

いやそれはね、だからそれは確かにちょっといけないんで。私自身はせっかく作ってくれたアンケート調査の一部は是非、市民はこういうことを思っていますよと、そういうことも共通理解として出したいんですね。

斎藤委員

聞いてみたいのはさっき女性が多いという話があった。まちかどだとか何とかそういう場所っていうのをどういう、いや、男性は割と恥ずかしいんですよ。帰りたくなる。お店何かでも女性がいると男性はあーっていう風になるから、女性が固まられると男性は非常に入りにくい。どういうところでやってもらえれば男性だけでなくみんなが動きやすいのかということ伺えると、商店街としても行事ごともしやすいですね。

田中委員長

参加しやすさ、にはどうしたらいいか。

斎藤委員

参加しやすさ。どういう風なところでやってくれると参加しやすいか。多分街角でいいというのは、ふっと見てふっと逃げれるというようなものだと思うんですね、多分。

田中委員長

アンケート調査の一部だけでもお話していただくことは、用意していただくことは可能ですか。

事務局（小林）

それはもちろん可能です。こういうことを話してもらった方がいいということ言ってもらったら、そこをピックアップして話します。

田中委員長

アンケートの結果の紹介の場じゃないので、一部だけで。

事務局（小林）

これというのがあるわけではないので、むしろ言っていたらそれを用意します。

田中委員長

私が印象に残っているのは不満な人、何に不満を持っているか。それは我々が今まで数回議論してきたことと重複することもあります。それは重複してもいい、みんなそう思っているということだし。それをだから我々の感覚で言うのではなくてアンケートの結果こういう風になっているということであれば、参加者の人もああこうなんだなということを知っていただけると思うんですよ。40代以下50代以上というのは絶対頭にくる人がいると思いますので、その不満な人、不満な内容のところを教えてくださいなと思います。

事務局（小林）

それはなにかパッと見えるようにします。不満な人を満足させるような何かをたとえば100万で考えてみる。

田中委員長

それは参加者もやる方もですね。

事務局（小林）

はい。それいろんなタイプでやってみてもいいかもしれませんね。たとえば皆さんが散らばって、それぞれの委員さんが一番関心があるような領域で設定をしてもらって、全部がみんな一致したことやなくなったりいいと思うんですよ。

田中委員長

あるグループは活動者の立場、あるグループは参加者の立場みたいにやってもいいかもしれないですね。あのちょっとすみません。私自身が今日時間的に制約があるものですから。もしどうしても今日まとまらなければ皆さま方ご意見いただいてこちらの方でまとめるようなことで後からでも言っていたいただければと。

事務局（小林）

皆さんに個別にヒアリングさせていただきましたよね、学生が。その学生とはもう顔見知りになったと思うんです。だからその人の方が言いやすいということであれば、こっそり後で電話でも聞いて話していただいても構いません、それは。

3. 今後の予定

田中委員長

ここでちょっと一区切りつけさせていただいていいですか。今日ちょっと司会の方でお話できなかったのが来年度4月以降の委員会の日程についてご説明いただいて。

事務局（鈴木）

資料④をご覧ください。この委員会が始まる時に19年度は6回、20年度は8回ということでお話しさせていただきましたが、来年度、20年度は7回ということで1回減りました。それ

と最終的な報告は21年3月の議会でする予定だったのですが、21年の4月に市議選があるので議会が2月議会になります。それで1ヶ月切り上げての行政報告になりますので、1ヶ月早くなります。ちょっとタイトになりますが、策定委員会が場合によっては備考欄に書いてありますが、まとめきれない場合にワーキンググループを組ませていただいて、そこで全員ではなくてご都合がつく方に、まとめさせていただくというワーキンググループをつくらせていただくということになるかもしれません。進み具合によって変わりますけれども。それと市民講座19年度はこのあいだの第5回で終了いたしまして、20年度5月くらいから新しいのを開始しようと思っています。それにつきましては今東大の学生さん達とどういうものかいいか考えておりますので、できれば市報4月15日号で募集させていただきたいなと思っています。全部で9回で月1回というののもどうかということもありますけれども、それは決まり次第また皆さんにはご連絡させていただきますのでよろしくお願いいたします。以上です。

田中委員長

もう一つ重要なこと。今年度は今日含めて第3木曜の夜やらせていただいたのですが、来年度はちょっとこの曜日ではできない。いろんな事情で。まだ何曜日ということは決まっています。私自身も第何曜日と決めるのはちょっと今の時点で難しいんですね。大変申し訳ないのですが。もちろん年度初めには決まりますが。

事務局（鈴木）

では4月の最初の日程が決まった時点でご連絡するというので。18:00-20:00でその後交流会ということで、日程につきましてはまた。

田中委員長

今日はどうも長時間にわたりご協力いただきましてありがとうございました。